

追悼 越田清和さん

国富建治

二月五日、私たちの友人である北海道の越田清和さんが亡くなった。まだ五七歳の働き盛りだった、彼ががんの手術をしたことは知っていたが、あまりにも早すぎる訃報だった。

ところで私は、いつ頃から越田さんを知ることになったのか、それがどうもはつきりしないのだ。私にとってはPARC（アジア太平洋資料センター）の越田さんだったが、彼の人なつつこい笑顔と、ひょうひょうとした語り口に出会ったのはおそらく一九九〇年代のいつごろか。彼がまだ三〇代の時だったと思うのだが……。

今、手元にある機関紙、ニュースの類で越田さんの話が出てくるのは、とりあえず二〇〇二年二月、アフガニスタン復興支援会議と「人道的介入」の問題点に焦点を当てた「新しい反安保実VI」（日本の参戦を許さない！実行委）の集会の記事だ。この報告記事は私が書いたもので、越田さんが集会のメイン報告者になっている。越田さんは一九九九年、東チモール独立のための住民投票に際して当時のインドネシア国軍が行った虐殺行為を阻むために、憲法前文と9条の理念をNGOの立場から実践する「連帯のための非軍事的介入」の思いを込めて、東チモールに赴いた。しかしその活動は、多国籍軍の到着以後になってしまったために、結局のところ国連の東チモール活動の枠を打ち破ることができなかったことを痛恨の思いで語った。

越田さんはこの時、国連や各国政府による「復興支援」という名の紛争地への介入を補完してしまうNGOの問題点をえぐりだし、NGO自身の「政府からの独立性」がどのように貫かれなければならないのかを強調していた。越田さんは、グローバリゼーションの中で「人道的介入」や「対テロ」戦争という、大国の側の新たな介入様式が登場するなかで、NGOが大国の思惑に利用される危険性を意識したギリギリの闘いを意識していた。

次に、私が越田さんと協力しながら活動したのは、越田さんが郷里の北海道に帰った後、二〇〇八年七月に開かれた「北海道・洞爺湖G8サミット」反対行動だった。この時、越田さんは「先住民族サミット」に関わりながら、「ほっかいどうピースネット」の中心として札幌での市民サイドの対抗アクションのまとめ役をつとめ、私は首都圏を中心にしたG8サミットを問う連絡会のメンバーとして、越田さんと連絡を取りながら、集会・デモの打ち合わせや、弾圧対策などで走り回った。

越田さんの最近の活動は、先住民族・アイヌ民族との関わりに大きな比重が割かれていたようだ。手元にある「インパクション」の最新号（188号）に掲載された、越田さんによる結城幸司さん（アイヌ・アート・プロジェクト）とのインタビューは二〇一二年一月二三日の日付になっている。亡くなる二カ月前のことだ。この時、越田さんの病気はかなり進行していたはずだ。先住民族アイヌの権利を踏みにじって制定された「北方領土の日」の二日前、彼の生命の灯は消えた。

言いたいこと、書きたいことは山のようにあつただろう。越田さん、さようなら。